

もっと

地方劇場の“障害のある人も鑑賞できる環境”モデルをつくる
令和7年度 鑑賞支援サービス 地域スモールモデル構築事業

報告書

だれもが

劇場に3

それぞれの劇場が築く鑑賞支援 はじめる、続ける、日常へ――

「鑑賞支援サービス 地域スモールモデル構築事業」とは

地域によって劇場や文化芸術のあり方は様々です。地方劇場の場合、都市部のような事業予算や最新の情報を持っていないところもあれば、貸館や買取公演が中心というところもあります。地方劇場にも障害のある人たちが参加できる環境づくりを広めていくためには、これまでの方法ではなく、その地域や劇場にマッチした方法を模索しながら、地域と一緒にスモールモデルをつくっていくプログラムが必要です。

本事業は令和5年度からスタートした「地方に鑑賞支援サービスを普及させる」ことを目指したものです。特に、「地域格差」と「地域人材育成」に焦点を当て、地方の劇場でも鑑賞支援サービスを導入し、障害のある方々を迎える取り組みが開始されることを支援します。伴走型のサポートを通じて、各劇場が「はじめる」きっかけをつくり、「続ける」体制を整え、やがて「日常」の業務として定着させていく――その多様なプロセスを支援してきました。

令和7年度の取り組み

令和7年度は、継続劇場として、あきた芸術劇場ミルハスと北上市文化交流センター さくらホールfeat.ツガワ、新規劇場として、まつもと市民芸術館、松本市波田文化センター、JMSアステールプラザ、新日本造機ホールと連携して事業に取り組みました。

新規連携劇場では、松本エリア、広島エリアへと対象地域が広がり、それぞれの地域特性や劇場規模に応じた鑑賞支援サービスの実施を模索しました。継続劇場では、1年目の経験を踏まえ、ボランティアの組織化や全公演への鑑賞支援サービス配置など、独自の発展を遂げています。

また、本報告書では、プログラム終了後も鑑賞支援サービスを継続・発展させているいわき芸術文化交流館アリオスと荘銀タクト鶴岡の取り組みも紹介します。事業化や予算計上による継続体制の確立、地域全体への波及効果など、自立的な展開の事例を共有することで、持続可能なモデル構築の道筋を示します。



事業実施にあたっての特記事項

- 劇場で予定されている事業に、障害のある人たちも参加できる鑑賞支援サービスを付加。
- 本事業が負担する費用は鑑賞支援サービス部分（育成支援を含む）のみ。それ以外の公演にかかる費用については劇場側の事業予算で実施。
- 鑑賞支援サービスとは、字幕や音声ガイドといった「鑑賞時の想像支援サービス」にとどまらず、「情報や場所に到達するための接続・移動サービス」や「コミュニケーションサービス」を含む。

目次

はじめる、続ける、日常へ—それぞれの劇場が築く鑑賞支援 ……P.1

新規連携劇場の取り組みを紹介します ……P.3

一般財団法人松本市芸術文化振興財団

まつもと市民芸術館 ……P.3

松本市波田文化センター ……P.10

JMSアステールプラザ ……P.12

新日本造機ホール(くれ絆ホール) ……P.16

継続連携劇場の取り組みを紹介します ……P.20

さくらホール feat. ツガワ(北上市文化交流センター) ……P.20

あきた芸術劇場ミルハス ……P.24

いわき芸術文化交流館アリオスと荘銀タクト鶴岡の今 ……P.30

おわりに ……P.32

一般財団法人松本市芸術文化振興財団

<https://www.matsumoto-geibun.or.jp/>



まつもと市民芸術館

2004年開館。「演劇を中心とした創造型劇場」として、オリジナル作品の創作や地域との協働を重視した劇場運営をおこなっています。2023年4月からは芸術監督団として、团长／芸術監督[演劇部門]の木ノ下裕一氏、芸術監督[舞踊部門]の倉田翠氏、ゼネラルアートアドバイザーの石丸幹二氏を迎え、市民とともに創る舞台芸術を追求しています。

- 施設概要**
- 主ホール(1,800席)
 - 小ホール(288席 ※バルコニー席含む)
 - 実験劇場(360席)
 - オープンスタジオ
 - スタジオ2
 - スタジオ3
 - スタジオ4
 - M2会議室

- 運営** 一般財団法人松本市芸術文化振興財団



松本市波田文化センター

1995年開館。地域に根ざした文化活動の拠点として、市民の自主的な文化活動を支援するとともに、多様な文化芸術事業を展開しています。

- 施設概要**
- アクトホール(260席)
 - 図書館
 - 練習室
 - 会議室(3室)
 - ハイビジョンシアター 他

- 運営** 一般財団法人松本市芸術文化振興財団



取り組みの成果と考察／南部充央

一般財団法人松本市芸術文化振興財団の取り組みは、まつもと市民芸術館、波田文化センター、松本市音楽文化ホールの3館でスタートしました。3つの劇場で同時に鑑賞支援サービスの導入を目指すという意欲的な計画でしたが、残念ながら松本市音楽文化ホールは実施に至りませんでした。この結果は、鑑賞支援サービスの導入が劇場の意思だけでは成り立たず、体制や条件が揃って初めて実現するものであることを示しています。一方、実施に至った2館の取り組みはそれぞれ異なるものでした。劇場の規模や地域性、事業予算や人員体制が異なる中で、画一的方法を当てはめるのではなく、今の自分たちにできることを見極めて実行に移した点は高く評価できます。中でも、まつもと市民芸術館が地域との連携を目指して重ねた取り組みと努力は特筆に値します。関係機関や当事者のもとへ何度も足を運び、対話を重ねる中で、人と人とのつながりが少しずつ形になっていきました。鑑賞支援サービスの構築は、制度や技術の整備だけではなく、地域の中に信頼関係を築いていく地道な過程そのものであることを、まつもと市民芸術館の取り組みは教えてくれています。

まつもと市民芸術館の取り組み

担当者に
聞きました



まつもと市民芸術館
企画制作担当の陸川亜子さんにお話を伺いました。

事業参加前の状況

鑑賞支援サービスについて、どの程度知識がありましたか？

正直に言うと、全く知りませんでした。具体的にどのような内容で、何をすればいいのかも理解していない状態でした。劇場での鑑賞支援サービスの必要性についても、あまり強く感じていなかったというのが本音です。

事業に参加して、考え方はどう変わりましたか？

取り組みを重ねていくなかで、サービスを必要としている人たちの存在に気づかされました。また、サポートを実施する意義や、対象となる方々との連携の大切さなど、様々な視点からこの事業について考えさせられるきっかけをもらいました。今後は、さらにサポートを充実させていく方向で継続していく必要があるという意識に変わりました。

劇場スタッフ全体の意識変化はどうでしたか？

アドバイザーである南部さんを招いての研修が数回実施され、徐々にスタッフの間でも関心や意識が高まってきたように感じます。特に公演を控えた事前研修では、大勢のスタッフが実際の現場を想定した内容で実地研修をおこないました。最初は知識や特別な意識もなかったスタッフたちも、経験や体験を通して、より関心や意識を深めたいという気持ちに変化してきていると思います。

最も課題を感じたこと、工夫したこと

どの段階で最も課題を感じましたか？

情報発信の段階です。まずは、支援サービスの対象となる地域の福祉団体や行政機関を調べることから始まりましたが、右も左もわからない手探り状態のなかでコンタクトをとることに苦労しました。

また、視覚や聴覚に障害のある方々にどのような形・方法で情報を伝達すればきちんと伝わるのか、コミュニケーションの取り方に難しさを感じることも多々ありました。

松本という地域ならではの特性はありましたか？

広報宣伝活動をしていて感じたのですが、松本市は情報が届きそうで、実は情報がなかなか行き渡らないところがあります。閉鎖的というか、意外と情報が広まりにくい地域特性があると感じました。

最も大きな課題は何でしたか？

どうしたら実際に劇場に足を運んでもらえるか、ということです。

それをどう乗り越えましたか？

地域の福祉団体や学校、行政などに直接出向いて、実際の現場の方の声を聞きました。関係各所と連携して協力関係を築けたことが非常に大きかったと思います。何度も足を運びながら信頼を得て、支援サービス事業への理解や協力を得られたことで、実際の公演に予想以上のお客様が来ていただきました。

地域との連携について

福祉団体や関係機関との連携はうまくいきましたか？

視覚障害者団体との連携は非常にうまくいきました。定期的に訪問し関係を構築したことで、松本視覚障害者福祉協会の会長が前日に下見に来てくださったり(盲導犬同伴)、会員への情報拡散を積極的に協力していただきました。

ただ、聴覚障害者団体との連携には厳しい一面がありました。見えないけれどこちらが発した言葉をきちんとありのままに受け止めてくれる視覚障害の方々に対して、聴覚障害の方々とは手話通訳を通じて、または筆談などの何かしらの手段を介しての意思疎通が必要で、互いに本意が伝わりにくい面があると感じました。

効果的だった情報発信の方法は？

直接訪問です。特に視覚障害者福祉協会には何度も足を運び、対話を重ねました。会長からは「2月公演について、会員に早めに配りたいから、情報ができたらすぐに教えてほしい」と、積極的な協力姿勢を示していただけました。

障害のある方に情報を届けるうえで、どんな工夫が必要だと感じましたか？

障害の特性にもいろいろあるため、会合などに出席して当事者の方たちの声を聞き、どのような方法で情報を得ているのか、またはどのような手段なら伝達可能か、ヒアリングを重ねることが重要だと考えています。

連携した団体・人材について教えてください

松本視覚障害者福祉協会、松本市聴覚障害者協会といった地域の福祉団体、松本市障がい福祉課やこども福祉課などの行政機関、長野県松本盲学校、長野県松本ろう学校といった教育機関、そして3つの手話サークルと連携しました。

まつもと市民芸術館プロデュース 「チャーホフを待ちながら」

鑑賞支援サービス対象者：目が見えない・見えにくい人、耳が聞こえない・聞こえにくい人

開催日時：音声ガイド対象回 2025年11月8日(土) 13:00開演

字幕対象回 2025年11月9日(日) 13:00開演

会場：まつもと市民芸術館 小ホール

総観客数：約210人

主催：一般財団法人松本市芸術文化振興財団

鑑賞支援サービス

音声ガイド、字幕サービス(ポータブルディスプレイ字幕)、音声補聴サービス(ヒアリンググループ)、事前説明会、移動支援・介助サービス

具体的な実施内容

▶ 音声ガイドサービス

視覚障害のある人に向けて、音声ガイドサービスを提供しました。開演15分前から事前説明会を実施し、舞台の特徴、座席の位置、トイレの場所などを詳しく説明しました。音声ガイドは、専門のナレーターによって場面・状況説明が役者のセリフの途切れた沈黙部分で流れる形式で、セリフに影響がないよう配慮しました。操作はボリューム調整のみのシンプルな機器を使用し、視覚障害のある方でも使いやすい設計としました。また、視覚障害者福祉協会の会長が前日に下見に来館(盲導犬同伴)し、トイレなどの事前案内を実施。当日は視覚障害者4名(盲導犬2頭)が来場され、レセプションスタッフがアテンドをおこないました。

▶ 字幕サービス(ポータブルディスプレイ字幕)

耳が聞こえない・聞こえにくい人に向けて、字幕サービスを提供しました。出演者のセリフをリアルタイムで文字表示し、アイコンで話者を視覚的にわかりやすくしました。ワークショップ参加者である人工内耳装用の中学生とその母親が利用。当初「本当は必要ないかも」と抵抗していた本人も、鑑賞後は「字幕があると内容が分かりやすかった」と高く評価してくれました。

▶ 音声補聴サービス(ヒアリンググループ)

客席の一部にヒアリンググループを設置し、補聴器や人工内耳を使用している方が直接音声を聞き取れるようにしました。また、専用受信機の貸し出しをおこないました。当日、50代女性が受付で希望され試用。「家でテレビの音量を家族

に注意される。恥ずかしいが、このようなものがあれば嬉しい」と話し、鑑賞後は「非常によく聞こえた」と喜んでいました。

▶ 事前説明会

開演前に、視覚障害のある方を対象とした事前説明会を実施。舞台セットの構造、演者の立ち位置、音響や照明の演出など、視覚的な情報を言葉で詳しく説明しました。

▶ 移動支援・介助サービス

視覚障害のある方の入館から座席までの誘導、トイレへの案内など、レセプションによる移動支援をおこないました。南部さんによる事前研修を受けたスタッフが対応しました。

サービス利用者数

音声ガイド 4人

字幕サービス 1人(その他、モニター4人)

音声補聴サービス 1人(その他、モニター13人)



実施して見えてきたこと

達成できた主な成果

今回の事業で達成できた主な成果は3つあります

1つ目は、対象となる団体との連携や、鑑賞支援サービスの提供を必要とする方々とつながることができたことです。

2つ目は、広報や宣伝周知の方法に悩みつつも、現場の声を聞きながら、連携機関や団体の方にご協力いただいたことで、より広範囲の方々に情報を共有することができ、結果につながったことです。

3つ目は、対象となる団体へ何度も足を運びながら信頼を得て、支援サービス事業への理解や協力のもと、実際の公演に予想以上のお客様が来てくださったことです。

想定とのギャップ

視覚サポート対象者については、想定以上の来場と情報周知の協力が得られました。視覚障害者4名(盲導犬2頭)の来場は、初めての取り組みとしては大きな成果だったと思います。

一方で、聴覚サポート対象者については想定を下回る結果でした。サポートを実施することに関心や興味を示していただいていたため、必ず来てもらえるものと思っていましたが、実は全く関心がなかったということがわかりました。

印象的なエピソード

前日の下見

視覚障害をお持ちの方が、公演当日だけでなく、会場や座席の位置、経路などの確認をするために前日も来てくださったことが印象

に残っています。劇場に来ることへの不安を少しでも軽減したいという思いが伝わってきました。

「また来たい」という声

今までは芸術文化に興味があっても劇場に足を運ぶという気持ちにはならなかった、会場までたどり着いたとしてもそこから先の不安があった、「聞こえないから」「見えないから」という理由で足が向かなかった——そんな声が多く聞かれていました。

それが、サポート実施後は「また来たい」「レセプションスタッフがアテンドしてくれるなら不安なく行ける。2月も行きたい」と言ってくださるお客様が何人もいたことが、何よりもうれしかったです。

演劇への理解が深まった中学生

人工内耳装用の中学生が、当初は「聞こえるのになんでこんなことしなきゃいけないの?」と抵抗していましたが、終了後には「やっぱりそういうの(字幕)があってよかった」と感想を述べてくれました。

さらに、アンケートには「僕は初めて字幕タブレットを借りました。一つ驚いたことがあります。それは俳優さんが長いセリフをしっかり覚えていて、全部その通り(字幕の通り)に言えていたことです。きっとたくさん練習したんだと思います」と書いてくれました。字幕を通じて、演劇そのものへの興味・理解が深まった貴重な例だと思います。

音声補聴システムの可能性

当日受付で音声補聴システムを希望された50代女性は、「恥ずかしい」という気持ちを抱えながらも試用してくださいました。鑑賞後には「非常によく聞こえた」と喜んでおられ、聴覚障害者だけでなく、高齢難聴者にも有効であることが実証されました。

運営面での気づき

受付・誘導の重要性

木ノ下芸術監督から「鑑賞サポートの内容(ソフト)を考えることに意識が集中していたが、それをどう手渡すか(表方)の方が重要。3:7で、誘導・受付の方が大事」という指摘がありました。

開演15分前から事前説明を開始する予定でしたが、ギリギリに来場される視覚障害のある方がいて、チケット精算から着席まで時間がかかりました。また、通路が狭く、慣れないアテンドスタッフが焦る場面もありました。

ただ、南部さんからは「開場時間中にお客様が着席することで、他のお客様に迷惑という考えは全く不要。堂々としていてよい。むしろ『よく来てくださった』という態度を示すべき」とアドバイスをいただきました。視覚障害者5名、盲導犬2頭の来場は「非常に評価できる成果」だと励まされました。

スタッフ間の連携

舞台側と受付側の連携が十分でなかった点が課題として浮かび上がりました。開演前に全スタッフで情報共有する時間を設けることの重要性を実感しました。

劇場の姿勢を明確に示す

木ノ下芸術監督から「強い気持ちで『これがあるんだ、当然なんです』というスタンスが重要。『やってますけど、何か?』というくらいの態度で、ロビーに『今日は字幕タブレットと音声ガイドがあります』と貼り出し、一般観客にも『(客席に)サービスが必要な人がいる』ことを示すべき」という提案がありました。

実際、一般観客からの批判的意見はなく、むしろ市・県の関係者からは「これでわかるのだろうか」「こういうのがあるのはいいね」との肯定的な意見をいただきました。

今後の課題と展望

音声ガイドについては、利用者から「登場人物のABC表現がわかりにくかった」「もっと情報が欲しい」「もっと少なくしてほしい」など、さまざまな意見が寄せられました。

南部さんからは「音声ガイドの作り方は、実際の利用者の声を聞きながら、劇場スタッフと制作者と一緒に相談して発展させていく。第一回目は手探りだったが、今後は松本の観客に最適なスタイルを探っていけばいい」とアドバイスをいただきました。

また、木ノ下芸術監督からは「いつまでも東京から人材を呼ぶのには限界がある。松本の人材で、劇場が音声ガイドのナレーターやライターを育成すべき。松本には役者が多いので、その方々に音声ガイドを担当してもらおう可能性もある」という提案がありました。「松本独自のスタイル」を確立していくことが、今後の目標です。



まつもと市民芸術館プロデュース 「みんなのための古典芸能」

鑑賞支援サービス対象者：目が見えない・見えにくい人、耳が聞こえない・聞こえにくい人、車いす利用者

開催日時：2026年2月14日(土) 14:00開演

会場：まつもと市民芸術館 小ホール

総観客数：約220人

主催：一般財団法人松本市芸術文化振興財団

鑑賞支援サービス

字幕サービス(ポータブルディスプレイ字幕)、音声補聴サービス(ヒアリングループ)、手話通訳(舞台手話、客席手話)、点字プログラム、移動支援、事前説明会、視覚障害者優先席の設定

具体的な実施内容

▶ 字幕サービス(ポータブルディスプレイ字幕)

耳が聞こえない・聞こえにくい人に向けて、タブレット字幕サービスを提供しました。5名が利用しました。

▶ 音声補聴サービス(ヒアリングループ)

客席の一部にヒアリングループを設置し、補聴器や人工内耳を使用している方が直接音声を取り取るようにしました。また、専用受信機の貸し出しをおこないました。事前予約4名、当日申込1名の計5名が利用しました。

▶ 手話通訳(舞台手話・客席手話)

舞台上および客席での手話通訳を実施しました。聴覚障害のあ

る来場者が想定を大きく上回り、大勢の方が利用されていたように見受けられました。

▶ 点字プログラム

当初予定していなかった点字プログラムについて、地域の団体と連携しながら協力を得て作成・配付を実現しました。視覚障害のある方4名に配付しました。

▶ 移動支援

車いす利用者1名に対して、移動支援サービスを提供しました。

▶ 事前説明会

開演前に舞台上で視覚障害者向けの事前説明会を実施しました。

▶ 視覚障害者優先席の設定

視覚障害のある方が安心して鑑賞できるよう、優先席を設定しました。5名が利用しました。

サービス利用者数

字幕サービス 5人

音声補聴サービス 5人(事前予約4人、当日申込1人)

手話通訳 人数不明(大勢の利用が見受けられた)

点字サービス 4人

移動支援 1人(車いす)

視覚障害者優先席 5人

連携した団体・人材

松本視覚障害者福祉協会、松本市聴覚障害者協会、松本市障がい福祉課、松本盲学校、松本ろう学校、松本市内の手話サークル3団体



実施して見えてきたこと

達成できた主な成果

今回の事業で達成できた主な成果は3つあります

1つ目は、1回目のチェーホフ公演を通じて築いた地域の各団体・教育機関との連携がより強固になり、広報周知が多方面へ行き届いたことです。その結果、サポートを必要とする大勢のお客様にご来場いただくことができました。

2つ目は、当初予定していなかった視覚障害のある方向けの点字プログラムを、地域の団体と連携・協力しながら作成・配布まで実現できたことです。現場の声から生まれた新たなサービスが、より多くの方へのサポートにつながりました。

3つ目は、視覚に障害のあるお客様と聴覚に障害のあるお客様が一堂に会し、それぞれ異なるサポートを受けながらも同じ公演を同時に楽しんでいただけたことです。

想定とのギャップ

全体として想定以上の成果がありました。当初の予想をかなり上回るお客様にご来場いただき、特に今回は視覚障害のある方に加えて、聴覚障害のあるお客様にも大勢お越しいただくことができました。1回目の公演では聴覚サポート対象者の来場が想定を下回っただけに、大きな前進といえます。一方、ろう者の来場が想定を大きく上回ったことで、必要なサポートが一部行き届かなかった場面もありました。今後はお客様からいただいたご意見をもとに、より細やかなサポートを提供できるよう改善していく必要があります。

最も大きな課題

視覚・聴覚それぞれの障害のあるお客様に対して、どのようなサポートを提供すべきかという判断が最も大きな課題でした。福祉団体の会合等に参加して助言をいただくなど、できるだけ当事者を含めた関係者の声を反映させながら対応を進めました。それでもサポートが十分に届かなかった方がいたことは今後の課題として受け止め、改善点を検討していきます。

今後の展望と課題

今後、鑑賞支援サービスを継続していく予定です。

継続するうえでの課題は、予算確保、技術・ノウハウの蓄積、地域との連携強化です。

特に、音声ガイドや字幕の「地産地消」——松本の人材で、劇場が音声ガイドのナレーターやライターを育成していくことが重要だと感じています。

また、木ノ下芸術監督から提案された「クレジット表示」も検討して

いきたいです。「〇〇さんの音声ガイドなら行きたい」と、当事者が「自分は誰のサポートが心地良いか」選べるようにすること。「まつもと市民芸術館の音声ガイドといえば〇〇〇」というような特色を持つことも良いと考えています。

地域との関係性をさらに深める

視覚障害者福祉協会とは非常に良好な関係を築くことができました。今後は、この関係を活かしてさらなる対話を重ね、「最前列の席はどうだったか?」「事前説明15分前はちょうど良いか?」など具体的にヒアリングしながら、地域のニーズに合わせたサービスへと発展させていきたいです。

将来的には「まつもと市民芸術館 演劇鑑賞会」のような組織化も視野に入れていきます。

聴覚障害者団体とのつながりについては、継続することで振り向いてもらえる可能性があります。また、高齢難聴者、難聴者団体など、違う場所への働きかけも有効だと考えています。

音声補聴システムの全公演標準装備化

音声補聴システムは、聴覚障害者だけでなく高齢難聴者にも非常に有効であることが実証されました。「申し込み不要、いつでもお声がけください」という形式で、全公演に標準装備することを検討しています。

松本独自のスタイル確立

文字の大きさ（高齢者が多いのでやや大きめ）、音声ガイドの情報量、字幕のスタイルなど、やり続けるなかで「松本ならではの最適解」を見つけていきたいと考えています。

実施を
振り返って

アクセシビリティ 実施1年目を終えて

まつもと市民芸術館プロデューサー 小川知子

まつもと市民芸術館は、オープンして20年余、ほとんど鑑賞ガイドを行ってきませんでした。障害者差別解消法の改正と芸術監督として木ノ下裕一が着任したのを機に着手することとなりましたが、現場には知識も経験もありませんでした。アクセシビリティにこれまでも取り組んできた木ノ下と南部アドバイザーのもと、劇場の令和7年の最重点目標にアクセシビリティの実施を据えると宣言して、とにかく船を漕ぎ出しました。人口24万の地方都市でどのようなニーズがあるのかを把握するために、制作職員1名を配し、現状把握とニーズの掘り起こしを開始しました。松本市役所の関係部署と地域の関連団体に出向き、当事者に聞き取りを行いました。当初は必ずしも歓迎されはしませんでした。担当者が粘り強く、定期的に会合に顔を出し、徐々に信頼を得ることができました。その結果、11月に実施した演劇『チェーホフを待ちながら』では、4名の視覚障がい者にご来場いただきましたが、聴覚障がい者は応募がなく、別事業参加者の中学生(人工内耳)にモニターとして参加してもらいました。2月に実施した『みんなのための古典芸能』は、手話狂言、警女歌など障がい者アーティストを起用したことが親近感を得たのか、200名の劇場に約20名の障がい者の方にご来場いただくことができました。しかし、対象者が多くなれば、ご意見や不満も多くなります。それは健常者も障害者も同じだと思いますが、まだまだ私たちには経験も知識も不足していることを痛感しました。船出したばかりの劇場なので、方向を示す灯台であるアドバイザーの存在は非常に大きいものでした。来年度は、鑑賞ガイド必須の公演の全国ツアーを計画しています。実施2年目、まだまだ試行錯誤は続いていきますが、引き続き松本のアクセシビリティを模索していきたいと考えています。



担当者に
聞きました



松本市波田文化センターの玉井敏敬さんにお話を伺いました。

事業参加前の状況

鑑賞支援サービスについては少し知識があり、必要性もやや感じていました。以前から大切なものと考えていましたが、具体的に何から始めればいいのか分からない状態でした。

最も課題を感じたこと、工夫したこと

正直に言うと、最初の段階で最も課題を感じました。判断材料となる情報、経験、知識が不足しており、何をすればいいのか分からず、手探りで進めました。試行錯誤を重ねながら、徐々に方向性を見出していった感じです。

「連携」という言葉の意味も、最初は具体的にイメージできませんでした。知識も経験もない状態で、どう進めればいいのか戸惑いながら取り組みました。

効果的だった情報発信の方法は、「うたの楽しみ」の参加者に、事前の回で直接アナウンスしたことです。

地域との連携について

今回は株式会社ソナールと連携し、専門的な技術サポートを受けながら実施しました。福祉団体や行政機関との連携については、初めての取り組みということもあり、どのように関係を築いていけばいいのか模索中です。

「うたの楽しみ」2025

鑑賞支援サービス対象者：耳が聞こえない・聞こえにくい人

開催日時：2025年11月13日（木）

会場：松本市波田文化センター アクトホール

総観客数：97人

主催：一般財団法人松本市芸術文化振興財団

鑑賞支援サービス

音声補聴サービス（ヒアリンググループ）

具体的な実施内容

▶ 音声補聴サービス（ヒアリンググループ）

耳が聞こえない・聞こえにくい人に向けて、ヒアリンググループによる音声補聴サービスを提供しました。

「うたの楽しみ」は、参加者が歌を楽しむイベントで、個人参加が多く、純粋に歌に集中する雰囲気が特徴です。このイベントの参

加者に直接アナウンスすることで、音声補聴システムの利用を促しました。

前日に機器を設営し、当日午前中には職員向けの体験会を実施。本番では受付で「音声補聴システムをお試しいただけます」と案内し、希望者に貸し出しました。

サービス利用者数

音声補聴サービス 6人



実施して見えてきたこと

想定以上の成果

音声補聴サービスの利用者は1～2人を予想していましたが、実際には6人が利用してくださいました。想定以上の成果でした。

運営面での気づき

取り組みを通じて、劇場スタッフの意識が変わりました。特に大きかったのは、「聴覚に障害のある人は外見で見分けがつかない」という気づきです。常に「もしかしたら聴こえにくい人かもしれない」という意識を持って接客するようになりました。

また、「きっと劇場に来たがっているという前提を持たないで接することが大切」ということも学びました。意識が高まり、情報や知識が増えたことも成果だと感じています。

今後の展望と課題

継続については未定ですが、今回の事業参加は、劇場で鑑賞支援サービスを継続的に実施していくきっかけになりました。意欲も大いに高まりました。

継続するうえでの課題は、予算確保と人材確保です。今回は財団からの支出をせずに実施できましたが、今後どのように継続していくかは検討が必要です。

JMS アステールプラザ

<http://h-culture.jp/>



施設
概要

大ホール 1,204席
多目的スタジオ 定員224人
市民ギャラリー 532㎡

運営

公益財団法人広島市文化財団

アステールプラザは『文化芸術を創造し、感動と希望をもたらす地域文化の拠点』をキャッチフレーズに掲げ、《創る》《育てる》《観る》《支える》をコンセプトに、多様な文化芸術活動や舞台芸術の創造を行っている複合施設です。

取り組みの成果と考察／南部充央

アステールプラザでは、対象が演劇公演であることは当初から決まっていますが、ターゲットやサービスの選定は事業打ち合わせの中で意見交換を重ねて決定しました。聴覚障害者向けの字幕サービスという案もありましたが、最終的にはよりハードルが高いと思われる視覚障害者への音声ガイドに挑戦する道を選びました。音声ガイドのナレーターは兵庫県のピッコロシアターに相談し、ピッコロ劇団の俳優に依頼しました。これは地域を越えた劇場間連携の好例でもあります。特に印象的だったのは、地域の人や団体との連携の強さです。制作スタッフや当日の運営スタッフとして地域人材が積極的に関与し、運営研修には地域の劇団員たちが多く参加しました。研修終了後、まだ本番を迎えていないにもかかわらず「自分たちの劇団公演でも実施したい」という声が上がったことは、この取り組みの波及効果を象徴するエピソードです。限られた人員の中でできることに限定するのではなく、地域人材に協力を仰ぎ、できることの可能性を広げていったアステールプラザの姿勢は、地方劇場における鑑賞支援サービスの実施体制として非常に優れたスモールモデルです。

アステールプラザの取り組み

担当者に
聞きました



アステールプラザの金沢章子さんにお話を伺いました。

事業参加前の状況

これまでの状況

いまある環境や人材の中での対応はしてきましたが、今回のように、障害がある方に演劇を観ていただくという取り組みは初めてでした。

実施に向けて設定した目標

「障害がある方のため」という特別なことではなくて、障害の有無に関わらず、皆さんと一緒に楽しんでいただくところを一番念頭に置いて取り組みました。当事者の方が5人程度来てくださるといいなと思っていたところ、鑑賞支援サービスの対象公演でない日にも突然お越しいただく方もいらっしゃるなど、予想以上にニーズが多かったと感じました。スタッフも市民から公募したのですが、熱意を持って大勢参加していただきました。

最も課題を感じたこと、工夫したこと

どの段階で最も課題を感じましたか？

初の試みであるということもあり、手始めに対象公演にどのようなサービスが必要で、また実施可能かを考えることに時間を費やしましたが、外部スタッフの理解と協力のもと、臨機応変な対応で乗り越えることができました。

広島という地域ならではの特性はありましたか？

県民性として、新しいものに興味を持つけれども、飽きっぽいという特徴はあると思います。今回は初めての取り組みで、実施する側もお客様も初めてということもあり、サポーターも来場者も多く来てくれましたが、今後継続していく中で、いい意味でみんなが慣れてきて日常的になればなるほど、今回と同じように足を運んでくださるのか、という不安はあります。

最も大きな課題は何でしたか？

初めてのことで準備不足も多く、当日も動線の部分や受付の場所が分かりにくいなど、スムーズにいかないことがありました。当日の動線では、運営設計に問題がありました。音声ガイド利用者の受付をホワイエの外に設置したのですが、そのことが案内を複雑化させてしまいました。音声ガイド利用者は一度受付をされてから、会場ホワイエへ案内され、さらにホワイエでお待ちいただき、その後、客席にご案内するという複数段階での案内になってしまいました。

それをどう乗り越えましたか？

公募で集まったスタッフやサポーターの皆さんがいなかったら成り

立ちませんでした。運営サポートのスタッフは、丁寧にお客様に対応してくれましたし、制作部のスタッフも最初から熱心に取り組んでくれました。例えば、福祉機関への働きかけなどきっかけはホール職員がつけましたが、そこから多数に広がり、点字パンフレットの作成などは、公募スタッフが率先して提案・実施してくださったので、ホールの職員が後追いになった部分は反省点ですが、集まったスタッフのおかげで乗り切れました。

地域との連携について

福祉団体や関係機関との連携はうまくいきましたか？

非常にうまくいったと思います。広島市障害福祉課を通じて（公財）広島市視覚障害者福祉協会にアプローチしたことをきっかけに、地域の関係機関・団体の多くに協力を求めることができました。さらに外部スタッフが県の外郭団体の職員で、もともと鑑賞支援サービスに熱心に取り組まれていたこともあり、より広く細やかな連携を図れたと思います。

効果的だった情報発信の方法は？

SNSでの拡散が主でしたが、地元のメディアが注目してくださって、「初めて鑑賞支援サービスを導入します」とお伝えしたところ、大きく取り上げていただきました。また、社会福祉協議会や市の視覚障害者協会とは当初からうまくつながりが持っていたことも大きかったです。今回は視覚障害がある方を対象に実施しましたが、聴覚に障害がある方がいらっしゃる場合にも対応できるようにと、ろう者の協会などにも説明に行けたので、情報が届いたのかなと思っています。

組織体制について

今回は公募スタッフやサポートの皆さんのおかげで乗り切ることができましたが、サポートスタッフは無償での参加でした。その部分は、今後継続していく上での課題だと思っています。

アステールの演劇プロデュース公演のテクニカルスタッフは、外注ではありますが、例年、同じ外注スタッフに関わっていただいています。事業に理解があるスタッフたちなので、特段に心配はなかったです。

演劇引力広島 第22回プロデュース公演 「はぐらかしたり、もてなしたり」

鑑賞支援サービス対象者：目が見えない・見えにくい人、車いす利用者

開催日時：2026年2月18日(水)～22日(日)

※うち21日(土)14時公演のみ鑑賞支援サービスを実施

会場：JMSアステールプラザ 多目的スタジオ

総観客数：600人(公演期間中の総人数)

主催：公益財団法人広島市文化財団アステールプラザ、広島市

鑑賞支援サービス

音声ガイド、点字サービス(点字プログラム・チラシ)、事前の台本貸し出し

具体的な実施内容

▶ 音声ガイド

兵庫県立ピッコロ劇団さんの協力を得て、音声ガイドを導入しました。開演前には、登場人物や場面、舞台の構成などを紹介しま

した。本番中は、場面転換や役者の動きなどをリアルタイムでガイドしました。

▶ その他のサービス

音声ガイド台本貸出、点字チラシ・パンフレットの作成を実施しました。

また、前日にはモニターとして当事者参加による実証を行いました。

サービス利用者数

音声ガイドサービス 10人

点字サービス 10人

連携した団体・人材

点和会、グループ虹、広島市障害福祉課、広島市視覚障害者福祉協会、広島県立視覚障害者情報センター、兵庫県立ピッコロ劇団、地元で演劇活動をしている制作者の方々



実施して見えてきたこと

達成できた主な成果

今回の事業で達成できた主な成果は3つあります

1つ目は、一般への状況周知。

2つ目は、関係者・機関の理解と協力によるサービスの充実。

3つ目は、想定以上数のサービス提供。

印象的なエピソード

ヒアリング・研修をはじめすべてが勉強になりましたが、サービスまたサポート研修に対する地域の関心や参加者の熱心な取り組みが印象に残っています。

利用者からの反応としては、音声ガイドがよく伝わり効果的だったことと、観劇後のアンケート調査で「人生で初めて観劇された」との意見には心を打たれるものがありました。

意識変化

実施前よりは、かまえることなくもっとフラットに取り組めるようになりました。引き続き様々な間口を広げたいと考えております。

まずは事業主幹以下、本事業担当内での意識変化が見られました。

会館(劇場)スタッフへの全体への周知はこれからと考えております。

障害がある人たちに対して、「こうじゃないか」、「ああじゃないか」という思い込みのせいで踏み込めないと思っていた部分がありました。

でも、もうちょっと、一歩踏み込んでもいいんだということに気づくことができたのがよかったと思います。

今後の展望と課題

継続することが大事だろうなということを最初から思っています。来年度も会話劇として楽しめる作品をすでに予定しているので、今年度と同じようなシステムで実施できればと思っています。その先については、例えばダンサブルなステージなど、聴覚障害がある方にも楽しんでいただけるプログラムなども検討していきたいと思っています。

継続するにあたり、いくつかの課題があります。予算確保、継続的に関わる人材の確保、技術やノウハウの習得、そして地域との連携強化が求められます。

新日本造機ホール(くれ絆ホール)

<https://www.kure-shimin.jp/>



施設
概要

劇場形式 624人 座席数 581席(車いす席3席を含む)
平土間形式 750人(約500㎡)

運営

公益財団法人呉市文化振興財団

新日本造機ホールは、呉市役所庁舎内に地域文化の発信拠点として2016年に開館しました。ホールはプロセニウム形式の舞台となっており、可動式の1・2階席は平土間形式への変更が可能で、コンサート、演劇、講演会、展示会など多目的に対応しています。音響性能にも優れ、市民の幅広いニーズに応えるホールとなっています。

取り組みの成果と考察／南部充央

呉市文化振興財団の取り組みで特に評価したいのは、「これであっているのだろうか」という不安を抱えながらも、地域の障害福祉課や障害者団体、障害当事者との対話を大切にしながら一歩ずつ前に進めたことです。その積み重ねが集客に結びつき、足を運んでくれた方々から喜びの声を聞くことができました。また、鑑賞支援サービスを必要とする方々だけでなく、既存の観客にもしっかりと感動を届けるコンサートになったことも大きな成果です。終演後のエントランスでは、障害の有無に関わりなく様々な方が「とてもいいコンサートだった」と口々に感想を述べ合い、アーティストと記念写真を撮る姿が見られました。今後に向けては、実施体制の強化が期待されます。今回は中心となった担当者の熱意と努力によって実現しましたが、その他の職員の間わりはサポートにとどまっていた面もありました。この取り組みを継続的なものにしていくためには、特定の担当者に依存する体制から、組織として事業を計画し実施していく力へと発展させていくことが重要です。初年度に築いた地域とのつながりや経験を、組織全体の財産として共有・継承していくことが、次のステップとなるでしょう。

新日本造機ホールの取り組み



担当者に
聞きました

公益財団法人呉市文化振興財団の
木原裕太さん(左)、塩谷富美恵さん(右)にお話を伺いました。

事業参加前の状況

導入に向けて

これまで鑑賞支援サービスを導入した事業は行ったことがありませんでしたが、昨年度、府中市のジーベックホールさんで鑑賞支援サービスを導入したコンサートがあり、それを見学しました。その際に、コンサートを聴いていたお客様が次第に手を挙げたり、後ろに座っていた親子が前の方に行った姿がとても印象に残り、こういう取り組みが呉でもできればいいなと思い、実施することとなりました。実施を決めたものの、いざ手話通訳の方や社会福祉協議会の方のお話を聞く中で、チケットを買っていただけなのかどうかというところが難しいんだということを知りました。

対象、事業を決める

より多くの方に来場していただきたいのですが、対象とする障害の

範囲を広げすぎた場合、うまく対応ができず、不快な思いをさせてしまうのではないかと懸念点があり、どこまでの障害を対象とするのかについて悩みました。

アドバイザーやコーディネーターにも相談にのっていただき、「初回実施であるため、職員で対応できるところから始めてみよう」という方針のもと、視覚・聴覚障害者向けを中心に行う方向で固まりました。

最も課題を感じたこと、工夫したこと

どの段階で最も課題を感じましたか？

最初に悩んだのはチケット料金です。障害者割引を実施するのか、介助者割引がいいのか、社会福祉協議会のご意見も聞きながら様々な観点から検討しました。結果的に、介助者割引という形でチケット料金を決めましたが、どういう形がよかったのかは、アンケート結果なども検証しながら、今後考えていきたいです。

最も大きな課題は何でしたか？

広報です。当事者の方にどうやって伝えるのかという点で最も苦労しました。

チラシを作ってお見せしても、耳が聞こえない、聞こえにくい方には音楽コンサートということで難しいと感じてしまうことがあったので、どうしたら伝わるのだろうか悩みました。

それと会場がいつも勤務しているホールではないこともあり、本番当日の準備が不十分でした。

職員同士の情報共有の点でも反省点が多く、しっかりと余裕を持ってできなかったのも、協力してくれる方や来てくださる方も「やって

よかった」、「行ってよかった」と思ってもらえるような準備をするために、自分も成長しなければと思いました。

地域性のある広報ができなかったのも反省です。アーティストに協力していただくことに遠慮してしまい、呉の方にに向けた広報が不十分だったと感じています。

それをどう乗り越えましたか？

単にチラシを配るだけでなく、「こういったサービスをご用意しています」「サクスの演奏だけでなく、動きも楽しめます」という説明をしました。社会福祉協議会に行った際にも、その場にいた方に声掛けさせていただいたり、社会福祉協議会からもいろんな助言をいただき、そういった人と直接話をして、そこからつながっていくことが大切だと感じました。

地域との連携について

福祉団体や関係機関との連携はうまくいきましたか？

ややうまくいったと思います。社会福祉協議会には、障害のある方に近い立場でのご意見をいただき、チラシの配布等の広報に関してもご協力いただきました。

また、地域の要約筆記サークル様や点字サークル様、手話通訳様にもご協力いただきました。

要約筆記と手話通訳に関しては、本番日に調整を行ったのですが、前日のリハーサルから参加をしていただき、出演者も交えながら調整を行った方がより質の高いサービスを提供できたのではないかと感じました。

今回、何もかも初めてなので、その旨を伝えて、わからないところを

教えていただきたいという願いをしたところ、たくさんのご意見をいただけたのでよかったです。

組織体制について

今までは今回のようなコンサートを開催したことがなかったため、障害のある方が来館された際に職員が戸惑ってしまい、ご案内に時間がかかってしまうことがありました。しかし、事前の運営研修でお席までのご案内方法や接し方を学び、受け入れの体制を整えることで、障害のある方が来館されても対応できる自信につながりました。一方で、いつも勤務しているホールとは別のホールでの開催ということもあり、事前の準備や情報共有が不十分だったことが反省点です。いろんなことを内部で意見交換して決めていけたことはよかったですと思いますが、その経緯も含めて、もっと情報共有が必要だと思います。

お試し会の実施

「ここに響く音楽会 お試し会(ミニコンサート)」

本番2ヵ月前の2025年12月12日、音声補聴システムや字幕の投影テスト、手話通訳者の立ち位置調整等を兼ねたお試し会を実施しました。聴覚障害のある方1名(手話通訳利用)、視覚障害のある方2名、呉市障害福祉課の職員3名が参加しました。

聴覚障害のある方からのフィードバック

手話通訳によりステージ上で話した内容が理解でき、オーボエの音がすごく聴きやすかったとの感想がありました。一方、ホルンの音は聴きづらく、楽器による聴こえ方の違いがあることも分かりまし

た。「曲名がずっと出ていたら良かった」という意見があり、本番では演奏開始時に字幕で曲名を表示し、出演者にも必ず曲名紹介してもらうよう対応しました。

視覚障害のある方からのフィードバック

音の聴こえ方には満足いただきました。特に印象的だったのは、今まで何度かコンサートに来たことはあったが前の席に座ったことがなかったという声です。前に座ると演奏の中に入ったような体験ができたとのことでした。また、階段の段差が分かりづらいという施設面での指摘もあり、本番に向けた改善点を把握することができました。

赤外線補聴システムの検証

呉市障害福祉課の職員による検証では、真ん中の列ではスムーズに聴けたものの、端の席では雑音が入ることが確認されました。この結果を受け、音響スタッフに座席別のノイズマップ作成を依頼し、クリアに聴こえる推奨席を座席図で明示する対応を行いました。



ここに響く音楽会 ～ホールで感じる音のひととき～ 鑑賞支援サービス付きインクルーシブコンサート

鑑賞支援サービス対象者：目が見えない・見えにくい人、耳が聞こえない・聞こえにくい人、車いす利用者

開催日時：2026年2月15日(日)

会場：新日本造機ホール(呉市文化ホール)

総観客数：98人

主催：公益財団法人呉市文化振興財団

鑑賞支援サービス

要約字幕サービス(舞台上字幕)、音声補聴サービス(赤外線補聴システム)、手話通訳(舞台手話)、点字プログラム・チラシ作成、介助者チケット、カムダウンスペース

具体的な実施内容

▶ 要約字幕サービス(舞台上字幕)

耳が聞こえない・聞こえにくい人に向けて、舞台上の音響反射板の背板に字幕サービスを提供しました。演奏家のお話を要約筆記者が文字にして、音響反射板に要約して表示し、全観客100人が字幕を見られる環境を整えました。

▶ 音声補聴サービス

ホールに既設の赤外線補聴システムを使用しました。事前に「お試し会」を実施し、聞こえやすい場所や集音方法を検証。コンデンサーマイクで演奏音を確認したり、クリアに聞こえる場所を確認しました。

▶ 手話通訳(舞台手話)

舞台手話を実施。影アナと演奏家のトークで実施しました。

サービス利用者数

字幕サービス 1人(舞台上字幕のため全観客が利用)

音声補聴サービス 5人

手話通訳 2人

点字サービス 0人

車いす利用者 2人

介助者チケット 3人

連携した団体・人材

呉市社会福祉協議会、呉市身体障害者福祉センター、呉市福祉保健部障害福祉課、呉点字サークル「あい」、呉市要約筆記サークル「灯だい」、広島県手話通訳派遣委員会

実施して見えてきたこと

達成できた主な成果

今回の事業で達成できた主な成果は3つあります

1つ目は、鑑賞支援サービスが必要なお客様をお迎えする準備を整え、迎える体制がとれたこと。2つ目は、障害のある方と対話の機会を得ることができ、多くの貴重なご意見をいただいたこと。3つ目は、サービスの導入に不可欠な協力者の方々と繋がることのできたこと。

印象的なエピソード

音声補聴システムや字幕の投影テスト、手話通訳者の立ち位置調整等の鑑賞支援サービスの調整を兼ねて、30分程度のお試し会(ミニコンサート)を本番2ヵ月前に実施しました。耳が聞こえにくい方、目が見えにくい方にご協力いただけました。普段では気づけなかった改善点など貴重なご意見を多くいただけたことや、顔を合わせてコミュニケーションをとることができ、非常に良い経験となりました。

利用者の反応では、手話通訳者から、楽器の説明の際に「難聴者の方が手話を身を乗り出して見ていた」と教えていただきました。コンサートには、ほとんど行ったことがない方と伺っていたので、楽しんでいただけるのか不安でしたが、興味を持っていただけたことに嬉しく思いました。

意識変化

当初は、鑑賞支援サービスを導入するにあたり、サービス利用者に不快な思いをさせることなく対応することができるのかなど不安に思う部分もありましたが、今回のコンサートを実施して、サービス利用者が満足して帰られる姿を見ることができ、導入してよかったと実感いたしました。

誰もが安心してコンサートや舞台を楽しんでいただくためには、鑑賞支援サービスは必要だと強く感じました。

今後の展望と課題

様々な支援・助言があって実施することができたので、自分たちだけでどこまでできるのか、という不安はありますが、今回実施したサービスの中で、一つでもいいので今後も継続していきたいと考えています。

舞台公演や和太鼓公演など、様々なジャンルで、入り口を広げながらやっていきたいと思えます。

継続にあたっての課題として、予算確保、人材確保、技術・ノウハウの習得、地域との連携、利用者の確保があげられます。



さくらホール feat. ツガワ(北上市文化交流センター)

<https://www.sakurahall.jp/>



施設 概要

大ホール(1,310席)
中ホール(450席)
小ホール(移動席264席)
アートファクトリー 21室 …ほか

運営

一般財団法人北上市文化創造

さくらホールは、2003年に開館しました。天窗から光が降り注ぐ館内に21室のガラス張りの練習室「アートファクトリー」と共有ゾーン「さくらパーク」があり、いつでも"にぎわい"がある市民の文化広場です。地域交流事業「さくら盆ジュール大会」や「ふれあいアウトリーチプログラム」などで積極的に地域と交流し、さらには芸術家とも協働し創造性あふれる地域づくりに取り組んでいます。

取り組みの成果と考察／南部充央

さくらホールでは、課を超えたユニバーサルデザイン推進グループを発足させ、財団の経営計画に「社会共生事業」として正式に位置づけました。予算を一本化したことで、すべての主催事業に鑑賞支援サービスを導入できる体制が整いました。また、地域の手話サークルや視覚障害者団体など、様々な当事者との対話を重ねました。その結果、チラシの制作段階から当事者の声を反映させることができました。このことは想定以上の来場につながり、音声ガイドと補聴システムがすぐになくなる事態となりました。鑑賞支援サービスが「特別な取り組み」から「当たり前のサービス」へと転換させていくためには「理解者を増やさなければならない」という課題も浮かび上がりました。そのためには、技術的な発展だけではなく、デザイン的発展を継続的に追求すること、そして当事者との対話を重ねることで、鑑賞支援サービスが劇場の「当たり前の業務」として根づいていく可能性を示すことができました。7月のアクセシビリティ講座には60名以上が参加し、主催事業だけでなく貸館事業へも鑑賞支援サービスを広げていく取り組みも始まっています。

さくらホール取り組み

担当者に
聞きました



さくらホール 企画事業課の安藤綾乃さんにお話を伺いました。

事業参加前の状況

1年目の取り組み

1年目に参加した際、劇場に来づらい人(当事者)の顔が見えていないことを強く感じました。当事者の顔がわからないと、必要としている方に情報もサービスも届けられない。この気づきが2年目の方向性を決めました。

2年目に向けて設定した目標

1年目の取り組みを通じて、「劇場に来づらい人(当事者)の顔が見えていない」という課題が明確になりました。年度末に実施したグループインタビューでは、この課題をさらに痛感し、2年目は当事者の声を意識しながら事業を進めることを目標に設定しました。

また、1年目は企画事業課のみで取り組んでいましたが、2年目は劇

場全体での取り組みへと発展させることを目指しました。具体的には、鑑賞支援サービスの予算を一本化し、課を超えた協力体制を構築することで、「企画事業課が取り組むもの」から「劇場全体で取り組むこと」への転換を図りました。

最も課題を感じたこと、工夫したこと

どの段階で最も課題を感じましたか？

情報発信と本番準備の段階です。実施事業「手話と音楽と語りで綾なすライブセッション 2025」では音声解説を取り入れることは決めていましたが、当事者に情報を届ける方法を具体的に計画できていませんでした。視覚障害のある出演者の方や「手でみる博物館」館長の川又さんにご協力いただき、なんとか公演周知につなげることができましたが、行き当たりばったりで進めてしまったことを反省しています。

また、事前予約が少なかったことから機材レンタル数を5台ずつにしたのですが、想定以上に当事者とアクセシビリティに関心のある方が多く、当日貸出をお断りせざるを得ない方もいました。

北上市という地域ならではの特性はありましたか？

北上市で働く外国人の方々は、実はベトナム人、フィリピン人がとても多い地域でした。当初、多言語チラシを英語で作成しようと考えていましたが、実際には「やさしい日本語」の方が理解しやすいということが分かりました。

最も大きな課題は何でしたか？

チラシ制作段階から当事者との対話を重ねることです。手話サー

クル「ひびきの会」に校了前のチラシを見てもらったところ、「手話という言葉がはっきり入っていないと、自分たちが行っていい公演だと思っていない」と教えていただきました。

それをどう乗り越えましたか？

年度末にグループインタビューを実施し、子育て中の方、高齢者、支援学校の先生、手話サークル、外国人など、様々な当事者の声を聞きました。このグループインタビューが、2年目の取り組みの基盤になりました。

地域との連携について

福祉団体や関係機関との連携はうまくいきましたか？

ややうまくいったと思います。グループインタビューで出会った手話サークルの方々のもとを訪ねて、チラシ作成や必要なサービス、その伝え方についてアドバイスいただきました。8月には大ホールでFM補聴システムとポータブル字幕の体験会も実施しました。

効果的だった情報発信の方法は？

当事者の来場を促すには、直接訪問が最も効果的でした。ひびきの会の方々のお口コミで、たくさんの手話利用者の来場につながりました。公演チラシにアイコンとともに大きく説明書きをすることも効果的でした。立川志の輔落語会では、音声補聴システムの利用者が増え、盲導犬の来場もありました。

また、すべての主催事業時にホワイエで鑑賞支援サービスデスク(補聴システム貸出と筆談タブレット)を設置し、カゲアナでも案内をすることで、聞こえづらい方の当日利用につながりました。

障害のある方に情報を届けるうえで、どんな工夫が必要だと感じましたか？

当事者や関係者の方のお話で多いのが「自分が行ってもいい公演かわからない」ということでした。様々なサービスがあっても、それが小さいテキストでチラシの隅に書いているのと、わかりやすく表記されているのでは、安心感が違います。視覚障害の方は読み上げシステムを使うことを想定したテキストが必要ですし、迷ったときは当事者の声を聞きながら、安心して劇場に来られることが伝わるような表記や表現方法を模索することが必要です。

技術スタッフの主体的関与について

舞台技術課の金濱さんが主体的に技術サポートに従事したことが、今回の大きな成果でした。事前に音声ガイドのテストを繰り返したり、新しい補聴システム「オーラキャスト」を試すといったことが十分に行えました。



舞台技術課 金濱宏樹さん

組織体制の強化について

令和7年度にユニバーサルデザイン推進グループを、課を超えて発足させました。企画事業課、舞台技術課、利用サービス課、総務課

から職員が参加し、財団の経営計画に「社会共生事業」として正式に位置づけられました。

これにより、鑑賞支援サービスの予算を一本化し、すべての主催事業に、その事業規模に関わらず鑑賞支援サービスを導入できるようになりました。「企画事業課が取り組むもの」から「劇場全体で取り組むこと」という認識に変化しました。

ボランの会「宮澤賢治を聞く」 手話と音楽と語りで綾なすライブセッション 2025 宮澤賢治朗読劇「よだかの星」【注文の多い料理店】

鑑賞支援サービス対象者：目が見えない・見えにくい人、耳が聞こえない・聞こえにくい人、車いす利用者

開催日時：2025年9月20日(土) 開場 14:30 開演 15:00

会場：北上市文化交流センターさくらホール feat. ツガワ 小ホール

総観客数：93人

主催：一般財団法人北上市文化創造

鑑賞支援サービス

字幕サービス(スクリーン字幕)、音声補聴サービス(オーラキャスト)、手話通訳(舞台手話、受付手話)、音声解説(音声ガイド)、音声ガイド台本貸出、移動支援・介助サービス、要約筆記・ノートテイク、事前説明会、介助者チケット

具体的な実施内容

▶ 字幕サービス(スクリーン字幕)

耳が聞こえない・聞こえにくい人に向けて、スクリーン字幕サービ

スを提供しました。舞台上の音声情報を文字にして、スクリーンにリアルタイムで表示し、全観客93人が字幕を見られる環境を整えました。

▶ 音声補聴サービス(オーラキャスト)

新しい補聴システム「オーラキャスト」を導入しました。事前にFM補聴システムやヒアリングループなど、複数の機材を比較検討した結果、オーラキャストが最も音質がよいという結論に至りました。従来のFMシステムに比べて音質が格段に向上し、利用者の満足度も高いものでした。

▶ 手話通訳(舞台手話、受付手話)

手話俳優による舞台手話を実施。演技としての手話が、物語の理解をより深める効果を生み出しました。また、受付でも手話対応を行いました。

▶ 音声解説(音声ガイド)

視覚障害のある人に向けて、音声解説サービスを提供しました。受信機5台を用意し、リアルタイム実況で場面・状況説明を行いました。視覚障害のある出演者の白井さんや「手でみる博物館」館長の川又さんにご協力いただき、公演周知につなげました。

▶ その他のサービス

音声ガイド台本貸出、事前説明会(50人参加)、移動支援・介助サービス、介助者チケット(5枚)を実施しました。

サービス利用者数

字幕サービス 93人(スクリーン字幕のため全観客)

音声補聴サービス 5人

手話通訳 2人(地元の手話通訳者の人数。利用者数は多すぎて計測できず)

音声解説 5人

音声ガイド台本 3人

介助者チケット 5人

事前舞台説明会 50人

連携した団体・人材

手話サークル「ひびきの会」「虹の会」、北上市、岩手県立視覚支援学校、「手でみる博物館」館長



実施して見えてきたこと

達成できた主な成果

今回の事業で達成できた主な成果は3つあります

1つ目は、視覚・聴覚障害者や関係者との繋がりを持つことができ、実際にご来場いただけたことです。

2つ目は、情報解禁前から当事者団体の方にお話を伺い、チラシやメール用の案内文など、当事者の声を反映しながら広報活動に結び付けることができたことです。

3つ目は、課を超えた協力、とりわけ舞台技術課が主体的に技術サポートに従事したことにより、事前に音声ガイドのテストを繰り返したり、新しい補聴システムを試すといったことが十分に行えたことです。

1年目からの変化・発展

1年目は企画事業課のみでの取り組みでしたが、2年目は「社会共生事業」として予算を一本化し、ユニバーサルデザイン検討グループを設置しました。これにより、劇場全体でアクセシビリティ向上に取り組む体制が整いました。

また、7月に実施した公演主催者向けのアクセシビリティ講座では、他館(他県)の職員や利用者が来場とオンライン配信あわせて60名以上参加し、関心を持つ方が少しずつ広がっています。主催事業だけでなく、貸館事業へも鑑賞支援サービスが広まることを目指しています。

技術面でも、最新の補聴システムの体験会やアクセシビリティ講座、認知症サポーター養成講座など、様々な勉強会に参加し研鑽を積んでいます。立川志の輔落語会では、初めて補助犬を連れたお客様が来場し、補助犬同伴での鑑賞が実現できました。

印象的なエピソード

公演で音声解説(音声ガイド)を利用してくれた視覚障害者の親子がい

ました。普段はテレビやアニメでガイド付きのものを楽しんでいるのですが、生の演劇にガイドがついているものがあるということ自体、今回初めて知ったとのこと。さらに、ガイドがリアルタイム実況だったということを知ると、「そんなことできるの?」と驚かされていました。音声ガイドを利用した感想は、「役者の動きや情景がイメージできてとても楽しめたので、ガイド付きの公演があるなら今後も劇場に足を運びたい」と言っていただきました。

また、想定していた以上に当事者の方やアクセシビリティに関心のある方々が来場し、当日利用希望の補聴システムと音声ガイドの貸出受信機がすぐになくなってしまいました。嬉しさと同時に予測の甘さを反省しました。

意識変化

ユニバーサルデザイン検討グループを設置できたおかげで、舞台技術課はじめ、他課との協力体制がうまく構築できています。最新の補聴システムの体験会やアクセシビリティ講座など、様々な勉強会にも共に参加し、少しずつですが学びを重ねています。

今後の展望と課題

今後、鑑賞支援サービスを継続していく予定です。継続するうえでの課題は、予算確保、人材確保、技術・ノウハウ、地域との連携、利用者の確保、劇場運営陣の理解など、多岐にわたります。

しかし、2年間の取り組みを通じて、組織体制は整いました。ユニバーサルデザイン検討グループの活動、予算の一本化、そして何より、課を超えた協力体制が構築されたことが大きな成果です。

あきた芸術劇場ミルハス

<https://akiat.jp/>



施設概要

大ホール(2,007席)
中ホール(800席)
小ホールA・B
練習室(9室)
研修室(3室)
創作室(5室)

運営

あきた芸術劇場AAS共同事業体

2022年6月、新たな秋田の文化芸術の創造拠点として、秋田市千秋明徳町の秋田県民会館跡地に開館。高い音響性能と舞台機能を併せ持つ大ホールと、臨場感を重視した中ホールをはじめ、2つの小ホール、練習室、研修室、創作室を備えた劇場。秋田県と秋田市が共同で整備した全国でも例のない文化施設。



取り組みの成果と考察／南部充央

あきた芸術劇場ミルハスの2年目は、ボランティア制度のスタート、対象事業の拡大、字幕サービスの自主制作という3つの大きな成果がありました。

集まったボランティアには福祉現場の経験者もあり、全員が積極的で即戦力として活躍しました。同じ志を持つ仲間が増えたことで、中心スタッフ以外にも理解が広がり、「障害者に接するハードルが下がってきた」という実感も得られました。

対象事業は3つに拡大し、それぞれの特性に応じたサービスを提供しました。特に『飛び立つ前に』ではHELLO! Theaterアプリを活用した字幕サービスを職員が制作から当日運営まで担当し、大きな自信につながりました。また、地域の障害のある人たちをお招きした「お試し会」の実施を通じてより多くの障害当事者と直接対話する機会が生まれ、現場の声からサービス改善の具体的な手がかりを得られたことも重要な成果です。

事業終了後の振り返りでは、貸館事業や共催事業への展開の可能性を模索し始めました。この視点の転換は、スモールモデルが地域で発展していく重要な一歩となりました。

あきた芸術劇場ミルハスの取り組み

担当者に
聞きました



あきた芸術劇場ミルハス企画事業・広報課の伊藤栄子さんにお話を伺いました。

事業参加前の状況

事業参加前は、鑑賞支援サービスについて全く知りませんでした。やや必要性は感じていましたが、具体的な課題が見えていない状態でした。1年目の取り組みを踏まえた結果、2年目に向けた目標が少しずつ見えてきました。研修を受けたこと、当事者団体、福祉団体、関係者団体等との関わりにより、少しずつ理解を進めることができました。2年目は、サービスの拡大、お試し会の実施、ボランティア体制の構築を目標に設定しました。特に、1年目で人手不足を痛感したため、ボランティアの募集と研修を重点的に取り組むことにしました。

最も課題を感じたこと、工夫したこと

どの段階で最も課題を感じましたか？

1年目のサービス実施後、聴覚障害者の当事者の聞こえ方にかなり

個人差があることが分かった時です。聞こえ方の差によって、満足してもらえるサービスがそれぞれ違います。手話通訳・字幕・補聴システム以外にも方法がありますが、公演によってはできることとできないことがあります。

また、進めていく一方で、できることとできないことを精査する、どのように「合理的配慮」を実現していけばよいのが難しかったです。最終的には障害が原因で困難が生じているかどうかが配慮の基準になるということで対応することにしました。

最も大きな課題は何でしたか？

鑑賞支援や公演当日の劇場業務に従事する人手の不足です。

それをどう乗り越えましたか？

ボランティアスタッフを活用することによって乗り越えました。意欲的・主体的なボランティアさんが集まってくれたことで、職員が気付かない部分まで配慮が行き届いたと思います。ボランティアさんは鑑賞支援に関するお手伝いだけでなく、公演の資料配布や場内監視などの業務でも力強いサポートをしてくれました。

ボランティアの位置づけについて

ボランティアを単なる「無料のマンパワー」として捉えてはならないという認識を持ちました。ボランティアは職員と市民をつなぐ重要な役割を担っており、市民目線での気づきや声を届けてくれる存在です。

ボランティアに提供すべき価値は、やりがいと充実感、自分自身も楽しめる体験、障害当事者との対話や交流による学び、公演と一緒に楽しむという共有体験、生きがいや仲間づくりの場だと考えています。

地域との連携について

福祉団体や関係機関との連携はうまくいきましたか？

ややうまくいったと思います。秋田県障害福祉課にはサービスの説明、チラシ設置、手話通訳者の派遣等で協力いただきました。秋田市障がい福祉課にもサービスの説明、チラシ設置で協力いただきました。当事者団体である秋田県聴力障害者協会、秋田県視覚障害者福祉協会には直接出向き、サービスの説明、チラシの設置、協会会報誌への掲載、周知の協力をいただきました。秋田県難聴者・中途失聴者協会とは基本メールでのやり取りでしたが、お試し会をはじめ対象公演への積極的な参加・取りまとめで協力いただきました。

秋田県聴力障害者支援センターには、サービスの説明、チラシ設置、要約筆記者派遣手配などで協力いただきました。秋田県立視覚・聴覚支援学校には、1年目はサービスの説明、視覚支援学校の歩行介助資格を持つ先生から研修を受けました。2年目はチラシ設置のみでした。

効果的だった情報発信の方法は？

メディア活用が最も効果的でした。新聞報道やテレビ取材により、補聴システムの認知が広がり、申し込み受付していない公演でも当日利用希望者がありました。

障害のある方に情報を届けるうえで、どんな工夫が必要だと感じましたか？

障害の特性に応じた工夫が必要です。視覚障害であればチラシにユニボイス・点字を入れる工夫もできます。聴覚障害の場合は文字情報だけでは伝わらないこともあるので、直接当事者とコミュニ

ケーションを取ることが大事だと感じました。

若い世代の障害当事者に効果的に情報を届ける工夫が必要です。障害者の支援団体や支援学校だけでなく、障害のある子どもを持つ家庭のコミュニティーや病院などにも情報発信していけばいいかもしれません。

意識変化

2年目は事業メンバー 4人以外の職員にも研修に参加してもらい、鑑賞支援に対する意識向上を図りました。企画事業・広報課内の職員は、少しずつ障害者に接するハードルが下がってきたと感じます。ただ、総務課や施設課、舞台運営課の職員にも同じような意識やスキルの共有を図っていく必要があります。

障害のある方への対応について、職員の自信が向上しました。1年目の手探り状態から、2年目は積極的な姿勢に変化しました。合理的配慮の線引きについての理解が深まり、実践を通じて、様々な配慮の必要性を体得しました。

利用者からの好意的なフィードバック（「外は寒かったけど心はあったかくなりました」など）により、職員の視野が広がり、モチベーションが向上しました。

第3回あきた吹奏楽の日 ～大いなる秋田定期公演～

鑑賞支援サービス対象者：目が見えない・見えにくい人、耳が聞こえない・聞こえにくい人、車いす利用者

開催日時：2025年12月21日(日)

会場：あきた芸術劇場ミルハス 大ホール

総観客数：1,200人

主催：あきた芸術劇場ミルハス、秋田県吹奏楽連盟

鑑賞支援サービス

音声補聴サービス (FM補聴システム)、手話通訳 (舞台手話、客席手話、受付手話)、移動支援・介助サービス、要約筆記・ノートテイク、事前説明会

具体的な実施内容

▶ 音声補聴サービス (FM補聴システム)

耳が聞こえない・聞こえにくい人に向けて、FM補聴システムを提供しました。前年度と比較して大幅な音質改善が見られました。音響スタッフが補聴システムを使用しながら客席で音量調整を行った結果、45%程度の音量でノイズが少なく、クリアな音で聞こえるようになりました。

合唱参加者 (聴覚障害) は、去年は字幕のみ利用していましたが、今回補聴システムを試用したところ、自身の補聴器よりもはっきりと聞こえることを実感しました。音量65%で、従来はドラムの音しか聞こえなかったが、管楽器の音もしっかり聞こえるようになりました。

▶ 手話通訳 (舞台手話)

聴覚障害者への支援として、司会者の手話通訳を実施しました。

▶ 要約筆記・ノートテイク

難聴者への支援として、要約筆記・ノートテイクを実施しました。

▶ 移動支援・介助サービス

視覚障害のある方、車いす利用者の入館から座席までの誘導など、ボランティアスタッフによる移動支援を行いました。

▶ 事前説明会

視覚障害のある方を対象に、事前説明会を実施しました。

サービス利用者数

音声補聴サービス 2人

手話通訳 2人

移動支援・介助 3人

要約筆記 1人

連携した団体・人材

秋田県聴力障害者協会、秋田県視覚障害者福祉協会、秋田県難聴者・中途失聴者協会、秋田県聴覚障害者支援センター、全国要約筆記問題研究会秋田県支部、秋田市手話研究会



Kバレエ・オプト『踊る。遠野物語』

鑑賞支援サービス対象者：目が見えない・見えにくい人、耳が聞こえない・聞こえにくい人、車いす利用者

開催日時：2026年1月12日(月祝)

会場：あきた芸術劇場ミルハス 大ホール

総観客数：990人

主催：あきた芸術劇場ミルハス

鑑賞支援サービス

音声補聴サービス (FM補聴システム)、移動支援・介助サービス、事前説明会

具体的な実施内容

▶ 移動支援・介助サービス

車いす利用者2名の入館から座席までの誘導など、ボランティアスタッフによる移動支援を行いました。

サービス利用者数

移動支援・介助(車いす) 2人

連携した団体・人材

秋田県聴力障害者協会、秋田県視覚障害者福祉協会、秋田県難聴者・中途失聴者協会

舞台『飛び立つ前に』

鑑賞支援サービス対象者：目が見えない・見えにくい人、耳が聞こえない・聞こえにくい人、車いす利用者

開催日時：2026年1月24日(土)～25日(日)

会場：あきた芸術劇場ミルハス 中ホール

総観客数：1,110人(2日間)

主催：あきた芸術劇場ミルハス

鑑賞支援サービス

字幕サービス(タブレット字幕)、音声補聴サービス(FM補聴システム)、移動支援・介助サービス、事前説明会

具体的な実施内容

▶ 字幕サービス(タブレット字幕・HELLO! Theater)

初めての本格的な字幕サービス実施となりました。HELLO! Theaterのアプリを使用した字幕サービスを提供しました。2日間公演だったので、1日目の反省を2日目に活かすことができました。

▶ 音声補聴サービス(FM補聴システム)

耳が聞こえない・聞こえにくい人に向けて、FM補聴システムを提供しました。高齢者難聴者から「普段聞き取れないところも不自由なく鑑賞できた」という声が寄せられました。

▶ 移動支援・介助サービス

車いす利用者1名の入館から座席までの誘導など、ボランティアスタッフによる移動支援を行いました。

サービス利用者数

字幕サービス 4人

音声補聴サービス 6人

移動支援・介助(車いす) 1人

連携した団体・人材

秋田県聴力障害者協会、秋田県視覚障害者福祉協会、秋田県難聴者・中途失聴者協会



実施して見えてきたこと

達成できた主な成果

今回の事業で達成できた主な成果は3つあります

1つ目は、サービスの拡大です。2年目で実施したHELLO! Theaterのアプリを使用した字幕サービス、要約筆記のノートブックで難聴者への支援を広げられました。補聴システムは高齢難聴者のサポートに役立ちました。

2つ目は、お試し会の実施です。障害当事者に補聴システム・字幕サービスを試してもらい、意見・要望を直接伺うことができました。そして、お試し会参加者から公演当日のサービス利用申込みを得ることができました。

3つ目は、ボランティアとの協働です。1年目でボランティア登録について必要性を感じ、2年目で募集、事前研修を行いました。サービス利用の当日申込みもあり、職員だけで対応するのは難しかったです。ボランティアとの協働を今後も継続していきたいと考えています。

1年目からの変化・発展

1年目は手探り状態でしたが、2年目は初めてボランティアを募集し、実際に活動に参加していただいたことが最も大きな変化です。予想を超える応募があり、鑑賞支援サービスに対する市民の関心の高さが確認されました。

ボランティアは、機器説明、(字幕表示端末の)スタンド設置、車いす対応など、大きな支えとなりました。ボランティアの1人が活動後に語った「障害のある方の不安を取り除くサポートだけでなく、その

人が「新しい体験」を楽しむためのお手伝いができたことがうれしかった」という言葉が印象的でした。

技術面では、音響スタッフが前日リハーサルから入念に調整を行い、補聴システムを使用しながら客席で音量調整を実施しました。その結果、合唱の音がマイクで適切に拾われ、スピーカーから出力されることで、2階席まで届くようになりました。吹奏楽と合唱のバランスが良く、全体として一つの舞台としてまとまった音響になりました。

予算面でも工夫が見られました。手話通訳・要約筆記は県の設置通訳者派遣制度を活用し、交通費のみで済みました。字幕制作は職員による自主制作のため、追加費用なしで実施できました。ボランティアは無償での協力体制が確立し、補聴システムは既存機材の活用により、追加費用なしで実施できました。

印象的なエピソード

お試し会の参加者から「今まで様々な公演をあきらめていたが、鑑賞支援サービスの取り組みによって少し道筋を作ってくれたことがうれしい」との声がありました。

また、字幕サービス・補聴システムを利用された高齢難聴者が「普段聞き取れないところも不自由なく鑑賞できた」とお話しされました。

昨年から継続参加の方々は、より伸び伸びと楽しんでいる様子が見られました。新規参加の障害当事者2名(視覚障害者)は、終演後も興奮が冷めやらない様子で、大変満足度が高かったです。

新たな支援ニーズ

精神障害のある方から、音に敏感なため座席の位置によって快適に鑑賞できるかが変わる、席選びのサポートがほしいという要望が寄せられました。

今後、発達障害・知的障害のある方々への支援も検討していく必要があります。音に敏感な方向けに、スピーカーから離れた後方の席や2階席など、より快適に鑑賞できる座席を事前に確保すること、イヤーマフ(大人用・子供用)の貸し出し、カムダウンスペースの設置などを検討しています。

意識変化

職員の意識が大きく変わりました。一般客も含めて観客の高齢化が可視化され、全体的にバリアフリーな劇場づくりの重要性を再認識しました。利用者からの好意的なフィードバックにより、職員の視野が広がり、モチベーションが向上しました。今回の取り組みで職員の態度が変わり、それが利用者に伝わったことは大きな成果です。

今後の展望と課題

当事者全ての方の要望を受けるのは難しいですが、劇場ができることを見極めて対話を大事にし、これからも継続していきたいと考えています。

鑑賞支援サービスを実施できる事業が限られており、冬場に集中しています。期間が空くと、せっかく高まった関心や職員のスキルが

薄れる懸念があります。企画段階から実施まで、全ての自主事業で鑑賞支援サービスを提供するには人員が不足しています。

対応策として、貸館公演・共催公演への展開を検討しています。補聴システムは比較的導入しやすいため、貸館・共催公演でも積極的に活用します。主催者と相談し、補聴システム受付のみミルハスが担当する形式も検討しています。

また、技術スタッフは協力的ですが、企画段階からの関与が不十分です。当日の技術依頼にとどまらず、検証段階から参加してもらう必要があります。企画検証段階から技術スタッフに参加してもらい、専門的アドバイスを得る体制を構築していきます。

来年度以降の展開として、補聴システムのデフォルト化(全自主事業で補聴システムを標準装備)、字幕サービスの継続、ボランティア体制の維持・拡充を目指しています。

新規取り組みとして、「大いなる秋田」第三楽章への手話研究会の立ち上げ、支援学校へのアウトリーチ、知的・発達障害者向けプログラムを検討しています。

高齢者が多い地域なので、高齢者難聴で補聴システムを利用したいというニーズは今後増えていくのではないかと感じています。主催公演での補聴システムのサービスを常設できないか検討していきたいです。

連携した
劇場

いわき芸術文化交流館アリオスと荘銀タクト鶴岡の今

本事業の最終的な目標は、事業終了後も各劇場が自らの力で鑑賞支援サービスを継続・発展させていける体制を築くことにあります。

ここでは、支援プログラムを終了した2つの劇場が、その後どのように取り組みを展開しているかを紹介します。

(2026年1月26日、あきた芸術劇場ミルハスにて開催された東北エリア合同振り返り会の事例発表より)

いわき芸術文化交流館アリオス — 事業化と予算計上による継続体制

対象公演の段階的拡大

いわきアリオスでは、スモールモデル構築事業以前の2021年度にユニバーサルデザイン検討推進委員会を設立し、ハード・ソフト・サービスの各面からバリアフリーの見直しに着手していました。本事業への参加を通じて手探りだった取り組みに輪郭が見え始め、対象公演数は1年目の2公演から2年目は3公演、3年目は5公演へと着実に拡大しました。2026年度には7公演での実施を予定しています。公演数を増やした背景には、「まだまだ周知が行き届いていないのではないか」「2公演では選べるチャンスも少ない」というスタッフ自身の問題意識がありました。サービスの幅も年々広がっています。付き添い者が500円で入場できるwithチケットは有料自主事業のほぼ全てに導入されました。また、年間を通じてどの公演にどのようなサービスがつくかを一覧できる専用パンフレットを作成し、託児サービスや思いやり駐車場の情報もあわせて掲載しています。サービスを必要とする人に届けるだけでなく、広く市民にこの取り組みを知ってもらうことを目指したものです。

事業戦略への組み込みと体制移行

いわきアリオスでは3年単位で事業戦略を策定しています。2023～2025年度の戦略では「性別、国籍、障害の有無など、生活を取り巻くあらゆるポー

ダーを理解し、市民が日々を充実して生活できるような文化芸術を届ける」という方針が掲げられていましたが、2026～2028年度の戦略ではさらに踏み込み、「鑑賞支援サービスの導入や研修等によりスタッフの意識のアップデートを行い、あらゆる人が安心して鑑賞できる体制を作る」と明文化されました。事業全体の方向性として鑑賞支援サービスに取り組むことが明記されたことで、事業立案の段階から予算が確保される仕組みが整っています。運営体制も転換期を迎えています。これまではチラシ作成から各方面との調整、公演当日の対応まで主担当者一人が担ってきましたが、2026年度からは各公演の担当者が主体的に鑑賞支援サービスの内容を決定し、準備から当日までをスケジュールリングする体制に移行します。制作グループのスタッフ全員が鑑賞支援に関わることで、組織としての理解と対応力を底上げしていく狙いです。



©(株)ナカサンドパートナーズ

荘銀タクト鶴岡(鶴岡市文化会館) — 地域への波及効果

地域人材との協働による自走の実現

荘銀タクト鶴岡では、1年目に専門家の手厚い支援のもとでリアルタイム字幕や補聴システムを導入しました。この時、地域の要約筆記者たちも字幕タブレットを体験したことが転機となりました。「自分たちでもできるのではないか」という意欲が生まれ、2年目には地元の協力者と連携して自走での実施に挑戦。手話通訳者が舞台上に立ち、要約筆記者が字幕制作を担うなど、地域の人材がサービスの担い手として成長していきました。

3年目の市民オペラでは、この協働体制がさらに深化しました。公演の全台詞・歌詞を文字起こしたデータを地元の要約筆記者の方にお渡ししてから本番までの期間に何度も変更があったのですが、その度、快く対応していただき、逆に修正の提案もいただきました。3時間にも及ぶ台詞と歌詞を字幕化するという膨大な作業を完遂することができたのは要約筆記者の方からの積極的なサポートがあったからこそです。また、リハーサルやゲネプロにも立ち会い、タイミングやニュアンス、合唱と台詞の違いをどう表現するかなど細部まで調整を重ねています。「何一つ、一文字も落としたいくない」という強い使命感をもって取り組む姿は、地域人材が専門性を持った鑑賞支援の担い手へと成長した証といえます。

教育機関・外部団体を通じた地域全体への広がり

荘銀タクト鶴岡のもう一つの特徴は、劇場の外へと波及する影響力です。1年目に実証公演に協力した高校の吹奏楽部顧問は、異動後も「自分の生徒に絶対

やらせたい」と毎年協力を続け、活動は後輩へと引き継がれています。音楽ゼミの高校生たちも、鑑賞支援に限らず「手伝えることはないですか」と自発的に劇場に関わるようになりました。高校生たちは自らクラウドファンディングに挑戦し、昨年からの継続公演「目で聴く、身体で感じるコンサートII」を実現するなど、鑑賞支援をきっかけに劇場との関わり自体が深まっています。

こうした広がりを支えているのは、障害のある当事者との個人的な信頼関係です。お話し会をいち早く実施し、当事者の声に耳を傾けてスタートした荘銀タクト鶴岡の姿勢が土台にあります。「聞こえないのに心地良かった」「体が全く動かないけどダンスが楽しかった」という観客の声は、サービスを特別なものではなく日常の一部にしていくという劇場の目標が、着実に形になりつつあることを示しています。



おわりに

東北エリアの4つの劇場と歩んだ3年間を振り返ると、同じことを伝えつつも、劇場や地域の事情、関わる人材によって、取り組みの内容も直面した課題も生まれた成果もまったく異なるものでした。それぞれの劇場が自らの環境に合ったユニークなスモールモデルを築き上げたことは、この事業の大きな収穫です。各館に共通していたのは、当事者との対話を大切にしたこと。福祉団体を介した間接的なやりとりではなく、個人レベルで声を聴き、関係を築いたからこそ、サービスの改善も継続への意志も生まれました。そしてもう一つ印象的だったのは、4館すべてから「貸館」という言葉が出てきたことです。自主事業だけでなく貸館にも鑑賞支援を広げようとする発想は、障害のある人が選べる公演の幅を飛躍的に広げる可能性を持っています。こうした取り組みを通じて、鑑賞支援サービスは「特別な対応」から「劇場の役割」へと、職員一人ひとりの中で意味を変えていきました。その意識の変化こそが、事業終了後も自走し、継続し、発展していくための最も確かな土台だと感じています。この東北での経験を糧に、新たな地域や劇場との出会いの中でどんなモデルが生まれるのか、今から楽しみでなりません。

一般社団法人日本障害者舞台芸術協働機構 (JDPA)
代表理事 南部充央

もっと だれもが 劇場に3

もっと
だれもが
劇場に

3

地方劇場の“障害のある人も鑑賞できる環境”モデルをつくる 令和7年度 鑑賞支援サービス 地域スモールモデル構築事業 報告書

発行年月 / 2026年3月

発行 / 一般社団法人日本障害者舞台芸術協働機構 (JDPA)

企画・構成・執筆・記録 / 南部充央

広島県連携事業取材・執筆 / 佐藤ヒロキ

デザイン / いけながしろう (かえるぐみ)

文化庁委託事業「令和7年度 鑑賞支援サービス 地域スモールモデル構築事業」

主催 / 文化庁、一般社団法人日本障害者舞台芸術協働機構

連携 / 広島県「障害者鑑賞支援サービス導入事業」

